

推敲の過程

—八木重吉『秋の瞳』論—

中 島 賢 介

序

人を殺さば

ぐさり！と

やって みたし

人をころさば

こころよからん¹

一体何という詩であろうか。今にも凶悪犯罪に走らんばかりの少年が書いた手記のような詩だ。しかし、実はこれ、キリスト教詩人と呼ばれている八木重吉（1898～1927）の作品である。物騒な詩は何もこれだけでは終わらない。ストーブを「たたき切ってみたくなる」（悩ましき 外景）や「やるか！？／なんどき斬りこんでくるかわからぬのだ」（剣を持つ 者）、「みにくき まなこ病む 四十女の／べっとりといやにながいあご」（哀しみの 秋）といった表現を詩集『秋の瞳』の中に見ることができる。これが果たして草野心平に「日本の基督に関する詩は八木重吉の詩をもって私は最高としたい」²とまで言わせた重吉の手によるものなのだろうか。これらの詩については彼の作品を愛好する諸氏も御存知ないかもしれない。

それにしても昨今の青少年による凶悪犯罪の顕在化。途方に暮れる教員に、それらを糾弾する報道陣。教育問題と聞けば誰もが悪者探しや責任の擦り付け合いを繰り返している。こうした状況下で今一度彼の詩集を読み返すこともまんざら無駄ではあるまい。

重吉はこの詩集を発表した当時、旧制中学校の英語の教師であり、なかなか思うように進まない授業や生徒に対して不満を抱いていた。教え子の門脇清に宛てた手紙に、「殊に、自分の日々の仕事である『教へる』といふことのいかに耐え難いことであるだらう。いろいろの意味に於て、僕は学校の教師といふ仕事が耐え難い」³と愚痴ってみたり、また、自らの日記に「教壇にたちたるわれがきわまらず おろかしきものにけふもおもわる」⁴といった短歌をいくつも詠んだりしている。彼は自分の生業にあまりいい印象を抱かなかった。それどころか、日常の単調な生活に耐えかねて詩作や信仰、恋愛生活を営んでいる節さえ見受けられる。

八木重吉というと宗教詩を連想する読者が多いという現実には、編集者が彼の死後膨大な遺作を

中 島 賢 介

「宗教詩人八木重吉」という側面からしか捉えず、そのフィルターを通してしか彼を紹介できなかったという経緯が挙げられる。それが証拠に、死後出版された彼の詩華集には信仰詩が大半を占めており、それが信仰者の間で広まったというのが紛れもない事実である。しかし、実際には生前出版した唯一の詩集『秋の瞳』においては信仰を直接表明した作品が全くない。それゆえに、『秋の瞳』そのものを信仰の面のみで論じることが、果たして彼の本意であったかどうかと考えると否と答えざるを得ない。まして、この詩集から作品を抽出して信仰と強引に結び付けるのは、冒頭の詩を犯罪者の手記として紹介するのと同様ナンセンスである。確かに『秋の瞳』を論じる上で、彼の信仰は考察の過程で引き合いに出されなければならないが、信仰そのものを主題とすることは本末転倒な感が否めない。

そこで、今回は詩作上の経緯を踏まえ、詩集を編む際に作品が推敲された形跡の確認できるものを扱い、あくまでも芸術作品として、詩集そのものを再検討することにする。また、推敲されたことによって、作品がそれぞれ詩集においてどのような役割を果たすのかを考察し、詩集をどのように読むことが彼の本意だったのかを探ってみたい。なお、引用する作品については、右側に推敲前の作品を左側に推敲後の作品を並べて推敲箇所が一目で分かるよう配慮した。

1 八木重吉について

大正11年以降、当時としては珍しい恋愛結婚をした重吉は、妻登美子と二人の子に恵まれた幸せな結婚生活を営んでいた。しかしこの家庭を訪れたこともある数少ない詩友草野心平は、重吉の表情についてこういう感想を漏らしている。「八木重吉の顔は純粹にさびしさ一本である。(中略)直ぐにでも泣き出す顔だ。」⁵このある種のさびしさは、彼の結婚生活とは明確に区別されなければならない。というのも独身時代に膨大な手紙を恋人に送る場合の「さびしさ」と、結婚後も継続される「さびしさ」の2種類が考えられるからだ。前者の「僕は、生れ落ちるとからもう淋しい人間だったのです。僕は心の底から、めったに快活に笑えない人間なのです。富ちゃん—こんな淋しがりな兄だもの、今度逢ったらうんと、快活にしておくれ、愉快的兄にしておくれ、僕をほんとうに快活にしてくれることの出来る人は富ちゃん切りなのだから、」⁶という一日千秋の思いは、大正11年の結婚そして幸福な家庭生活のスタートとともに消滅したと考えていい。

しかし一方で、妻でさえも思わず首を傾げたくなるような「さびしさ」が『秋の瞳』には数多く登場している。登美子はこの「さびしさ」を信仰生活と結び付けている。⁷彼は内村鑑三の流れを汲む無教会派の信仰の持ち主であった。信仰面における個の存在をことさらに追究しようする無教会にあって、重吉はその必然的ともいえる孤独を味わわざるを得なかった。それが彼の孤立を余儀なくさせたとする説を妻は唱えている。こうした信仰面での苦悩が当時の詩集に載らなかった作品の中に滲み出ているのも確かだ。

だが、果たして信仰そのものだけが孤独を招いたのであろうか。先述したが、彼の教員としての生活も孤独であったと言えるのではないか。下世話な会話が飛び交う職員室、一向に授業を理解しない学生との確執、学校という場では理想を語り合う相手がほとんどいなかった。こうした表面上

推敲の過程

の孤立もなかった訳ではない。それを信仰だと単純に割り切ってしまうことには納得しかねる。

更に、この問題については、田中清光が「八木重吉論 2 孤立を意味するもの」⁸の中で次のように言及している。彼は重吉の信仰面における孤立も考察した上で、「ぼつんと、誰ともつながりを持たぬ場で詩を書いたための孤独ではない。それよりも重吉の詩がめざすところ、まぎれもなくその（彼方）によって生じた孤立にほかならなかつたということが出来る」との見解を持っている。この、（彼方）は彼の詩境と言い換えても差し支えなかろう。田中は、重吉の詩が、当時独自の詩境を開拓していった詩人（金子光晴、宮澤賢治、尾形龜之助ら）とは明らかに異質の「さらにとびはなれた孤絶の点に位置する」ものであったと、彼の詩境が他の追隨を許さない位置にあった事実を認めている。

つまり、重吉は信仰面の特殊性のみによって孤立していたわけではなく、彼が詩作を展開する上でその詩の独自性ゆえに孤立せねばならない立場に自分を追い込み、延いては詩が人間存在の深淵にまで及んできた際にふと出る言葉が「さびしさ」ということになる。それらが複雑に絡み合っただけで詩として表出されたのだと理解する方が当を得ている。

また、特筆すべきは、詩集『秋の瞳』においては、その「深淵」という言葉さえも、詩集に採録される段階になってすっかり削除されてしまったことだ。それは、こうした問題を語り合う詩友がおらず、その煩悶と葛藤のゆえに削除せざるを得なかつた、むしろそうした表現をすべて割愛し、平易なものに止めておこうという配慮を敢えてしていたのではないかと考えられる。この配慮に関しては後の章で検証してみることとする。

2 推敲の過程

『秋の瞳』の成立に関する概略

刊行にあたっては、再従兄弟の加藤武雄の尽力があつた。農民文学者としてよりも遠い親戚として詩集出版に向けて奔走したという事実を挙げておく。大正14年には自分の担当であつた「文章倶楽部」の編集実務を後輩に任せ、詩集出版に向けて本格的に動き出している。『八木重吉全集』（以下『全集』と記す）によれば、詩集が世間の目に触れるまでには作品を3回推敲・校正したことになる。すなわち「初稿」「第二稿」「浄書稿」「刊本」といった4種類のテキストが存在し、最終稿を除き、どんな推敲を経て採録されたのかを検証できるようになっている。この過程を検証する上で、重吉による覚え書きがわずか一片のみ遺されている。中身は「大正一四年六月十五日夜、詩集、秋の瞳、第二回の校正の控えなり、此の集に収めたる詩は、大正一一年秋より、大正一三年秋頃迄、約二ヶ年の間につくられしものなり、大正一〇年頃のも僅少あり、」⁹とあり、詩集が大正14年8月1日に出版されたことから見ても、この一片が最終段階の時期に書かれたものだと推測する「全集」編集者の見解は妥当である。

ところで、「浄書稿」は読点や振り仮名などが甚だしいものに限って修正されているため、推敲の過程を考察する上でそれほど重要ではない。よって、「詩集の中の作品」と「初稿」とを比較検討し、推敲の過程で作品がどのように変貌を遂げていくかを考察し論じていくことにする。

中 島 賢 介

詩形から見た推敲の意味

推敲の過程を辿ると、加筆訂正された若干の箇所を除けば、多くの作品が程度の差こそあれ、削除されてスリムになっている。もともと短い詩が削除されていくのだから、那須香氏が重吉の詩を「一種の俳句的なかたちの詩となっている。」¹⁰という指摘もあながち間違いではない。しかし、彼の詩を俳句的だと断定するにはあまりにも早急すぎる。確かに、彼の遺したノートに芭蕉関連の書籍を購入した形跡があり、実際詩稿に芭蕉の言葉を引用している箇所も存在する。だが、俳句そのものの言及がなく、辛うじて以下の詩に詩稿の中に残っているくらいである。

調律

萬葉には萬葉の調律が正しかった

芭蕉には芭蕉の調律が正しかった

これから先

真の詩人は自分自らの調律にのみよこそ正しい

問題は調律を生かす圧力である

(詩稿「鬼」より)

萬葉にかへってゆくのです

萬葉を越えてゆくのです

(詩稿「ものおちついた冬のまち」より)

ゆえに、これらの詩の内容を吟味すると、重吉の詩を俳句と断定することは早急な主張ともいえる。むしろ、彼は多くの研究者が指摘するように、萬葉集に造詣が深く、よく読んで妻に聞かせたり、自分でもそれを越える詩を作ってみたいといった詩も書いている。

では、具体的にどのような点で俳句や和歌を越えていこうとしたのか。その跳躍の軌跡も推敲の過程より見出すことができる。

或る日のころ (詩集中の作品)

或る日のころ (初稿)

或る日のころ

或る日のころ

山となり

山となり

或る日のころ

或る日のころ

空となり

空となり

或る日のころ

或る日のころ

わたしとなりて さぶし

さぶし わが むね

この一編のみでは十分ではないかもしれない。しかしその相違は非常に明確である。すなわち、

推敲の過程

初稿においては完全な七五調だが、詩集には最後の行で破調となり、「さぶし」という表現が作品の中から浮かび上がってくる。この持ち上げ方に跳躍の軌跡を確認することができる。また、この作品が出来上がったのが大正12年であることから、恐らくこの辺りから、定型詩から独自のリズムへの模索が始まったのではないかとの推測も成り立つ。それが証拠に大正11年の作品には、まだ定型詩が幅を利かせている。「雲」などはその典型だといえる。事象に対する表現形式が定型詩をとる癖がまだ抜けきっていない。

また、内容面ではどうか。これは詩集の中から大幅な削除が見られる一編の作品を挙げてみる。

キーツに寄す（詩集中の作品）
うつくしい秋の夕ぐれ
恋人の 白い 横顔 キーツの幻

キーツの寄す（初稿）
すぐれたる 詩人とは
読みゆくわたしの胸を むかむかさせないひと
たとへるならば
冬だけれど おほけらく しづかに
きれいにすんで なつかしい 沙翁の夢や
カブよくもスキートに
さやかにはしる ミルトンのこころのながれや
あゝ そして
うつくしい秋の夕ぐれ
恋人の 白い 横顔 キーツの幻

この対応から見ても、推敲の過程で削除の範囲は残された部分の4倍にも相当する。しかも詩集中に登場する人物は、英国の4人の作家から結局はキーツ一人に絞られていることがわかる。詩集『秋の瞳』には萬葉の詩人や芭蕉においては初稿の段階ですら登場しない。これにも明確な根拠がある。

芭蕉のようになるな
人麿のようになるな
きりすとだけがただし

（詩稿「論理は溶ける」より）

キーツとキリストにあこがれるひとはあるまいか？そのひとと語りたい—あゝ、いかに久しくこれをねがってをることであらう！

（「ジョン・キーツ覚書其の他」より）

これら2箇所からも引用を総合すれば、どのようにすればキーツの詩の世界とキリスト信仰を語ることができるか、日本の伝統的な詩を脱皮することができるかと、彼は様々に試みていることが理解できる。

中 島 賢 介

話は逸れるが、キーツと八木重吉との比較文学の視点から詩が論じられることは、松浦暢氏の「キーツと八木重吉」¹¹や佐藤泰正氏の「八木重吉と草野天平」¹²以来深く言及したものがなくまだまだ可能性の裾野は広がったままである。この研究に関しては、紙面の都合上割愛するほかない。

3 深淵から来る感情

かなしみ（詩集中の作品）
このかなしみを
ひとつに 統ぶる 力はないか

かなしみ（初稿）
このかなしみを
ひとつに 統ぶる 力はないか
ああ、だが
この かなしみの 消ゆる時は あるまい
宇宙がもえつくして
あたらしい 宇宙の芽が もえいづるまでは

推敲の過程を辿ると、変更された部分や削除された箇所を大別すると次の2種に分類できる。まず、重吉の根源的な感情とでもいうべき「かなしみ」「さびしさ」「怒り」を、必要以上に用いないでおこうとする配慮が見受けられる。この配慮そのものについては後述することにして、まずは訂正削除されたこれらの諸相を整理してみる。先述したが、実際対面したことのある草野心平は重吉の印象を、幸福な家庭生活とは裏腹に「さびしくそしていかにも孤独であった。」ことを手記に認めている。このさびしさが彼の境遇や詩境によるものであることも先に述べたが、この「さびしさ」と「かなしみ」とが同じ詩の中で並列している箇所がある。詩集『秋の瞳』『白い雲』では作品としては「かなしい しづかな 雲だ」としてしか表現されていないが、初稿では「さびしい かたちだ」とも述べている。鈴木二三雄氏の言葉を借りると「自然に対する無垢な感情の驚きであり、生命の自覚から来る寂しさ、哀しみである。前者を緯とするなら後者は経として美しい綾が織りなされている」¹³といえる。重吉自身が感じた「かなしさ」や「さびしさ」から考えると、白い雲に自分の姿を投影しているとの推測が成立する。

こうした感情の吐露を当時の感情詩派の影響と捉える研究者もいる。「ああ この春夜のやうになまぬるく さうしてただなんといふ悲しさだらう」¹⁴（萩原朔太郎「艶めかしい墓場」）といった自己の感情を独特のリズムで詠み込む手法は恐らく朔太郎や暮鳥、犀星によるものとされている。しかし、実際は北村透谷の「内部生命論」に直接学んだといった方が適切である。というのも感情詩派の感情が表層的で解放に向かう性質であるのに対し、重吉の感情は深層的で、人間や世界の存在の内奥へと掘り下げていくのが特徴だからである。感情詩派の作風が伝統的な世界観とするならば、彼の世界観はこれと性質を全く異にしている。

推 敵 の 過 程

象徴の詩

それはすえた感情から

はっこうしたるなうちなきまぼろし

民衆詩よ

みづからの眼のうつばりをしらざる

民衆詩人によりてうたわるゝきのどくさ

(詩稿「神をおもふ秋」より)

こうした詩からも、重吉は独自の詩境の中で自分の詩を位置づけようとしているのは明らかである。

貫ぬく光 (詩集の中の作品)

はじめに ひかりがありました

ひかりは 哀しかったのです

ひかりは

ありとあらゆるものに 息を

あたえました

にんげんのこころも

ひかりのなかに うまれました

いつまでも いつまでも

かなしかれと 祝福れながら

貫ぬく光 (初稿)

はじめに ひかりがありました

ひかりはかなしかったのです

ひかりはありとあらゆるものを

つらぬいてながれました

あらゆるものに 息を与へました

この世のどこを さがしたとて

しまひに かなしさの源へ

ほりあたらぬものがありませうか

いちばんつよく かなしさがさえわたるのは

わたしの〔あなたの〕こころの

深淵ぢやないでせうか

(こころこそ ひかりのいづみですもの)

この詩においても省略されている箇所は明らかである。根源的な「かなしさ」である。確かに詩の完成度としては詩集の作品の方が高いことは言うまでもない。だが、問題は「深淵ぢやないでせうか」という強い読者への呼びかけが削除され、「祝福れながら」とうたわれているという事実である。重吉は詩を「書いた」のではなく「うたった」ものだという認識を持っている。それはとりもなおさず重吉自身が述べているからで、そのこと自体に異論を挟むつもりは毛頭ない。だが、ではなぜこのようにうたわれなければならなかったか。

秋 (詩集中の作品)

秋が くと いうのか

なにものとも しれぬけれど

秋 (初稿)

秋が 来ると いふのか

何ものとも しれぬけれども

中 島 賢 介

すこしずつ そして わずかに
 いろづいてゆく
 わたしのころが
 それよりも もっとひろいもののなかへ
 くづれてゆくのか

すこしづつ そして わづかに
 いろづいてゆく
 わたしのころが
 それよりも もっとひろいもののなかへ
 くづれてゆくのか

みよ わたしのかなしみは ひろがつてゆく
 木よりも 草よりも しっかりと深んでゆく
 しろい かなしみが いろづいて ゆくのか

この詩も同様で、人間としての「かなしみ」が自然の生命よりも奥深く、更に広がりを見せているという点において示唆的である。というのも、これらの感情を彼の信仰の問題なしに解決することは不可能であるからだ。自然の中の一存在だとする東洋的な発想はここには全くない。この章の最初に引用した「かなしみ」の詩にも見られるように、初稿では宇宙に相對する確固たる自己が存在し、現時点の宇宙では人間がその根源に持つ「かなしさ」を消去することができそうにもないとの見解を表明している。この宇宙と人間との隔たりこそが、彼の感情表現の源泉である。

では「怒り」の問題にスライドさせるとどうだろうか。詩集『秋の瞳』には「怒り」の範疇に属する詩もいくつか存在する。序文にも掲げたいくつかの詩に加え、推敲の過程を辿ることができるものの一つに、「静寂は怒る」がある。

静寂は怒る（詩集の中の作品）

静寂は 怒る
 みよ 蒼穹の 怒りを

静寂は怒る（初稿）

静寂は
 怒る

 みよ
 蒼空の 怒ほりを

 こわれ易き
 冬陽の
 憤れる おののき

 静寂は
 喧騒よりも 怒る

冒頭に掲げた詩の数々は、先述したが、それぞれ単独で抽出すると詩集としても文脈を失い、危

推 敲 の 過 程

陰性を伴う。断っておくが、この「怒り」は、特定の人間に向けられたものでもなければ研究資料に見られるような「死を感じることでしか、過剰な生は補填され得ない」¹⁵ものでもない。人間同士の血なまぐさい争いといった次元のものではなく、人間存在そのものを形而上的存在と対峙させて始めてこの詩の鑑賞が成立する。すなわち、「ぐさりと やって」みたいなのは、形而上の存在が人間存在をいっそのこと殺してしまったらということ、人間が人間を殺そうというものではない。その解釈を応用すると「静寂は怒る」の削除部分の「静寂は 喧騒よりも 怒る」という箇所は、人間社会や自然界といった喧燥に包まれた枠内における怒りよりも、内面へと沈潜することによって生じる静寂のなかの「怒り」の方が問題となっている。こうした内省の際、形而的存在と自分自身との関係に摩擦を感じたときに彼の「怒り」は内奥から沸々と湧出する。噴出した感情を持ったまま見ると、周囲の風景そのものが怒りと表れてくる。このようにこの詩集で語られる「かなしみ」や「怒り」は、人間の外面的な単なる感情を指す言葉ではなく、人間の内奥の有り様を描いた表現であることに他ならない。

4 上昇と下降

次に削除、訂正された箇所の特徴として、初稿の段階が一つの完結した詩の世界を形成しているとしたら、推敲後の詩は不完全であるという点が挙げられる。この逆説的表現の根拠としていくつかの詩を取り出してみる。

無造作な 雲（詩集の中の作品）

無造作な くも

あのくものあたりへ 死にたい

無雑作な 雲（初稿）

無雑作な 雲

あの雲のあたりへ 死にたい

ふかい 空

悩ましき 外景（詩集中の作品）

すと一ぶを みつめてあれば

すと一ぶを たたき切ってみたくなる

悩しき 外景（初稿）

すとうぶを みつめてあれば

すとうぶを たたき切ってみたくなる

がらがらとたぎる

この すと一ぶの 怪！ 寂！

ぐわらぐわらとたぎる

このすとうぶの 怪！

寂！

悩ましげな世界よ

鳩が飛ぶ（詩集の中の作品）

あき空を はとが とぶ

鳩が飛ぶ（初稿）

秋の空を 鳩が とぶ

中 島 賢 介

それで よい
それで いいのだ

それでよい
それでよいのだ
わたしもそのように生きたい

草に すわる (詩集の中の作品)
わたしのまちが이었다
わたしのまちが이었다
こうして 草にすわれば それがわかる

草に すわる (初稿)
わたしのまちがひだった
わたしのまちがひだった
こうして 草にすわれば それが わかる
この草は しづかだもの

かすかな 像 (詩集の中の作品)
山へゆけない日 よく晴れた日
むねに わく
かすかな 像

かすかな 像 (初稿)
山へゆけない日 よく晴れた日
そりたつ むねの えめらるどの山
恋をわすれた日 さびしい日
むねに湧く
かすかにしろい 久遠の (愛の) 像

詩の物語性すなわち「語り」という側面から見ると、いずれの詩も初稿の方が一貫しているように思える。それは、詩人が最後まで言い切ろうとする姿勢を詩に見ることができるからだ。何らかの情景に詩人の琴線がかき鳴らされ、それが言葉とともに上昇していく。この上昇と共に感動は頂点に達し、最後の言葉でゆるやかに着地する。初稿ではその過程を全て読者に明示していて、作品としては平凡なものとなってしまうが、その分読者への誠意がこもっているという印象をも覚える。それゆえ、読者は詩を迫体験する容易さ、取っ付き易さを感じるのではないだろうか。これら初稿の全てが最後の行によって、感動が落ち着きと客観性を取り戻す効果を十分に引き出しているといえる。しかし田中清光氏が、『秋の瞳』に拾い上げられた詩の多くのものは、詩群中でみると、簡潔で凝縮した、詩群にあってピークをなすといつてよい詩である。それらをさらに彫琢して詩集を作っている。」¹⁶と書いているように、最後の段階を推敲の過程で削除することで作品を詩集の中に採録しているのは、一体なぜだろうか。このような短詩をより、短くして得られる表現効果とはどのようなものなのだろうか。

確かにこのような短詩に関して言えば、何も彼独自の詩形ではなく、白秋や露風に始まり当時の多くの詩人が採用したものであり、いわば一種の流行に乗ったものであったとする主張がある。だが、重吉には彼なりの短詩形へのこだわりがなかった訳ではない。

彼独自の詩とは一体どのようなものであると定義すべきなのか。これについての言及は研究者の数だけあるといつていい。ここでは推敲の過程を絡めて、「沈黙を大事にする詩」と位置づけようと思う。というのも『秋の瞳』に一貫した言葉が「しずけさ」であり、これは自然そのものに埋没

推 敵 の 過 程

する、芭蕉などが詠うような「寂けさ」の類いではない。、自然をあくまでも客体としてみる前に、自分の心をまず沈潜させるという行為によって得られる「しずけさ」である。

空をのみみてはいけない
草の葉のみにみとれてはいけない
人をもみよ
ちからづよくしかるのだが
よわいところはふるへてゐる
人をまともにみえぬ 死ぬようかなしさ (詩稿「純情に慕ひて」より)

という言葉のように、死を見ずには語るができない人間の「かなしさ」を彼は沈黙のうちに見出すのである。

まことに
悔いのみおほい
だまってゐよう
だまってゐよう (詩稿「み名を呼ぶ」より)

だまってゐよう
だまってゐるのは黒いいろで
わづかのことばを
白いもじとしよう (同上)

などといった記述が遺されている。これらの成立年代が大正14年の3月という、詩集の校正段階に成立したものであると考え合わせると、彼の沈黙に関する見解が詩集の推敵に大きく影響していると考えても不思議ではない。このような沈黙による内省を踏まえて考えれば、もともと短かった詩を更に削り、「語り」よりも行間あるいは作品間の「沈黙」に重きを置いたという推測も容易になる。また、上昇した感情をいわば言い放した形で読者に提示しておく方が、俳句にも見られるような余韻も残り、そこに作者と読者との共有空間も出来上がる。

このように、言葉によって情景を閉じ込めてしまうことをせず、出来るだけ言葉を省き、「言い放し」てみることによって共有空間を更に押し広げた詩の代表作といえるのが「かすかな像」だ。実際重吉が詩の作成段階に存在していた詩は明らかに恋と愛に関するイマージュである。初稿では「むねに湧く」という言葉で、忘れてしまうような「恋」と未来永劫の「愛」の対比があった。しかし、その部分を思い切って削除することでかえって詩の普遍性を獲得したといえる。詩集が刊行された当時は、「八木君の詩は即興的である」¹⁷という批評が出たが、こうした過程をつぶさに確認

中 島 賢 介

していくと、全くの見当違いであることが分かる。むしろ読者との共有空間を必死になって作り出し、共に自分の詩の世界を楽しんでもらおうとする配慮が至る所でなされている点に気づく。それゆえ、この詩集が出るや否や読者の支持によって、次々に詩の依頼を受けるようになるのである。

このことから見ても分かるように、彼は詩集を編む段階で未来派詩人のような誰彼ともなく自作の詩をばらまくようなことはせず¹⁸、むしろ自分の詩の世界を心から共有してくれる友人だけを必死になって作ろうとしていた。だから彼にとって詩集が売れることなど問題ではなかった。それは、詩集がかなりの廉価で販売されたこと、その売り上げ全てで聖書を買ってキリスト教の伝道の一助としたことから裏付けられる。

5 友を求める心

先述した通り、彼は詩集の売り上げ全てで聖書を10冊買い、それを近所に配ったという。詩集が廉価であったのも、どんな山の中の貧しい青年にも読んでもらうことができるようにと、定価を1円するところを70銭にしたのだと夫人に語っていた。¹⁹ 実はこのことがこの詩集を出版した最大の目的なのである。

ところで、夫人は手記に彼がそれまで詩人には一人も知り合いもいなかった、完全な孤独のなかで詩作をつづけてきたと書いている。これはあくまでも詩人の知り合いを得るために詩集を出したかのような書き方である。実際、彼はさまざまな詩人や批評家たちの意見を大変謙虚に受け止め、丁寧なお礼状を認めている。それはまぎれもない事実であり、その後も他の多くの詩集を買い求めていたことも否定しようがない。自分の詩を賞賛してくれる著名な理解者の登場を喜ばないわけではない。だがそうしたことは彼を表面上動かしただけで、それが作風に影響したとは考えにくい。何故なら彼はその後独自のスタイルを獲得していき、発病してからは特に信仰を前面に押し出してくる詩を書きつづけていったからだ。

話を戻すと、彼の詩集発刊の本来の目的は詩集の序文にはっきり記されている。

「私は、友が無くては、耐えられぬのです。しかし、私にはありません。この貧しい詩を、これを読んでくださる方の胸へ捧げます。そして、私を、あなたの友にしてください。」²⁰

この言葉は、図らずも詩集中の作品全てが果たす役割が集約されているということを示している。

本論の冒頭から、彼が教師としてその境遇に満足することがなかった。俗悪な会話が絶えない職員室、自分が理想とする世界を語り合うことの出来ない学校全体の雰囲気、詩作だけが彼の教員生活を支えていたことは既に書いた。そうした閉塞状況を妻登美子は最も身近に感じていた。スポーツや絵画などの趣味による気晴らしの生活を送ってはいたが、やがてそれらの余暇が全部詩作活動に向けられることになる。その中には信仰に関する詩作もあった。だが、これも先述した通り必然的に孤立を招くような信仰であった。しかも詩集では信仰を表明している箇所は「宇宙の良心」に、辛うじて耶蘇（イエス）の名前が登場するのみである。これとてそうした表明をすることで、信仰仲間を増やそうとした意図があったとは考えにくい。収益で配布した聖書10冊にしても、伝道が主目的なら詩集を廉価には設定していない。かといって、当時流行しつつあった民衆詩や象徴詩

推 敵 の 過 程

を内容面まで踏襲して創作仲間を積極的に増やそうとも考えられない。

詩集刊行の理由を考察すればするほど、これまでの研究者が評価するような不安定な所にこの『秋の瞳』は位置づけられないことが分かる。むしろ、彼は読者を自分の詩の世界に誘う自己紹介文を書くような気持でこの詩集を編んだのではないだろうかという考察が頭をもたげるのである。では読者とは誰か。それは熱烈な信仰者でもなければ、詩の創作者や研究者でもない。

彼が詩という自己紹介を通じて、名もなき詩の愛好者や経済的には逼迫していてもこれらの作品を通じて心が癒され、自分でも詩を創作することを考えているような読者にターゲットを絞って、彼らの欲求に応じた編集をしたのである。実は、そうした人々こそ、彼が心の底から詩空間を共有したいと考えていた読者であった。このような読者を友人にするためには、詩集自体が広く宣伝されなければならない。そうでなければ詩を公にする意味がない。言い換えるならば、公の詩集にしなければならぬほど、重吉自身が閉塞状況に追いつめられていたとわかっていい。もはや詩集を世に問うという行為しか残されていなかった。そのことが「私を、あなたの友にしてください。」20という痛切な響きを持って彼の口から語られている。

しかし、彼がこの詩集を、人生を賭けた事業にしたということまでは残念ながら言えない。それはこの自己紹介を通して得られた理解者との交流によって、自らの孤独を癒したいという意図も汲み取ることができるからだ。実際に彼は詩人の集まりや理解のある教え子などにしきりに自宅に遊びに来よう提案している。これは彼の場合、決して社交辞令といった類いの提案ではなかった。先述した通り、草野心平が確認したような、「さびしさ」が読み取れる表情などがそれを物語っている。心平が重吉の柏の家を訪問したとき、重吉はとても喜んで詩の話をしたという。心平には大変失礼な表現だが、重吉はむしろ、名もない人の来訪を心待ちにしていたのだ。自分の詩の調べを彼らに味わってもらいたい、そして彼らの喜ぶような作品を生み出しつづけていきたい、こうした強い意志をこの詩集全体からひしひしと感受することができる。

結び

しんじつをかたってくれる

たった一人の友もないのか

しんじつといふものが

とうてい人間にわからぬものなら

せめて切切の一念をみせてくれぬのか

「つひに 人は 独りだ」といふのか

それがじぶんにはあきらめられない

(詩稿「純情を慕ひて」より)

重吉がそれほどまで友の存在を追い求めるのはなぜかという問題を考えていくうちに、ひょっとしたら本当は、どこにも存在しない友を想像しているに過ぎないのかとの推測も働かせてみた。し

中 島 賢 介

かしこの推敲の過程を辿る作業において、少なくとも『秋の瞳』の段階ではまだ諦めていない。詩の世界を通じて必ず友と呼ぶことの出来る人間との交際が実現することを夢見、周到に詩集を編んだ彼の、けなげなまでの姿が浮んでくる。

やがて彼の詩は有名な信仰詩へと変貌を遂げ、キリスト教信者の間、またはキリスト教詩を愛する人々の中でよく引用されるようになる。だが、残念ながらこうした後期の作品から彼の詩世界を垣間見てしまうと、全く読者を極度にまで意識した『秋の瞳』の作品としての価値があまりにもないがしろにされてしまっている。推敲を辿ることにより、この『秋の瞳』こそが、彼が首尾一貫して製作に携わり、芸術作品としても高度なゲダンケンリーリック（思考詩）という体裁を整えた詩集だと結論づけたい。それもあちこちの手を加えては多くの読者に親しんでもらえるよう配慮した努力の跡を見るにつけて、詩人として、信仰者としての「愛」を感じずにはおれない。

反面、これは研究資料などで散見される傾向だが、一つの詩だけを故意に抽出し、当時の現代詩の傾向といった点のみで鑑賞するのは危険な行為である。基本的なことだが、作者の意図を十分に汲み取り、その意図に沿った形で論及しないとその鑑賞には意味がない。だから、敢えて今回は当時繰り広げられていた国内での詩作活動の傾向を極力外した形で論じてみた。

作品一つ一つが感動の焦点のみを抽出し、それが人間存在の内奥から来たものである。作品の完成度よりも、読者との交わりの中で深めていこうとした重吉に対して、心打たれながらも一度詩集を味わってみた。

以上

注

- 1 引用の詩は全て『八木重吉全集』全3巻 筑摩書房 増補版 平成12年
- 2 『八木重吉全集』別巻 筑摩書房 増補版 平成12年
- 3 『八木重吉全集』第2巻
- 4 『八木重吉全集』第3巻
- 5 2と同じ
- 6 3と同じ
- 7 吉野登美子著『琴はしづかに 八木重吉の妻として』彌生書房 昭和51年
- 8 田中清光著『詩人八木重吉』麥書房 昭和44年
- 9 『八木重吉全集』第1巻
- 10 那須香「八木重吉研究－重吉の詩観」『日本文学研究』梅光女学院大学日本文学会平成7年
- 11 松浦暢著『キーツ その夢と現実』吾妻書房 昭和54年
- 12 佐藤泰正著「八木重吉と草野天平」『福音と世界』新教出版社 昭和41年1月号～7月号
- 13 鈴木二三雄「八木重吉の詩」笹渕友一編『キリスト教と文学』第2集 笠間書院昭和50年
- 14 浅井清共編『新研究資料 日本現代文学 詩』第7巻明治書院 平成12年
- 15 同上
- 16 8と同じ

推 敵 の 過 程

- 17 2と同じ
18 嶋岡晨著『詩とは何か』新潮選書 新潮社 平成10年
19 7と同じ
20 9と同じ

参考文献一覧

- 『八木重吉全集』筑摩書房第1巻から第3巻と別巻 昭和57年、増補版平成12年
『普及版定本八木重吉詩集』彌生書房 昭和34年
鈴木亨編『八木重吉詩集』白鳳社 昭和42年
吉野登美子著『琴はずかに 八木重吉の妻として』彌生書房 昭和51年
吉野登美子著『わが胸の底ひに 吉野秀雄の妻として』彌生書房 昭和53年
関茂著『単純な祈り 八木重吉との対話』日本基督教団出版局 平成元年
岡安恒武著『八木重吉ノート 死と永遠』聖文舎 昭和52年
『高村光太郎全集』第8巻 筑摩書房 昭和33年
佐古純一郎著『祈る人 -キリスト教入門-』彌生書房 昭和58年
佐古純一郎著『孤独なる信徒』現題文芸社 昭和31年
『草野心平全集』（八木重吉のこと）第5巻 筑摩書房 昭和56年
（宮沢賢治、八木重吉、三好十郎への誘い）第9巻
（八木重吉「八木重吉・人と作品」）第11巻
江藤淳著『崩壊からの想像』勁草書房 昭和44年
佐藤泰正著「八木重吉と草野天平」『福音と世界』新教出版社 昭和41年1月号～7月号
佐藤泰正著『文学と宗教の間』国際日本研究所 昭和43年
佐藤泰正『詩集 近代日本キリスト教文学全集13』解説 教文館 昭和52年
森田進著『新版 言葉と魂 -詩とキリスト教』ルガール社 昭和52年
森田進「資料 八木重吉と末繁博一」『四国学院大学論集第31号』昭和49年
森田進「八木重吉 -詩の発生から消滅へ-」『四国学院大学論集第20号』昭和46年
鈴木二三雄「八木重吉の詩」笹渕友一編『キリスト教と文学』第2集 笠間書院昭和50年
江頭彦造「大正時代詩歌の宗教性-斎藤茂吉と八木重吉の場合-」
高柳俊一編『近代文学のなかのキリスト教』南窓社 昭和56年
堀 剛「八木重吉の詩に於ける死の美化について」『四国学院大学論集第95号 平成9年
那須香「八木重吉研究-重吉の詩観」『日本文学研究』梅光女学院大学日本文学会平成7年
浅井清共編『新研究資料 日本現代文学 詩』第7巻明治書院 平成12年
嶋岡晨著『詩とは何か』新潮選書 新潮社 平成10年